

# 大陸(中国)

思い出を語る

富山県 清嶋清三

昭和十七(一九四二)年十月下旬、召集令状来たりて金沢の部隊へ入隊する。その時家族は、祖母八十一歳、母五十八歳、私は二十三歳、妻は十九歳であった。私が出征すると残りは女ばかりですが、これも国のためで勅命であると覚悟しました。

なお家の稲作水田九反歩は近所の農家に耕作を依頼し、昭和十七年十一月四日、満州へ行き、昭和十八年四月には上等兵となりました。満州では北部国境警備でウスリー江対岸の柳が見えるところ

ろでした。

昭和十九年九月、虎林を出発、満州と中国の国境の山海関を通過、即日湘桂作戦に参加する。

湘桂作戦とは支那派遣軍が四月十八日に開始した「二号(ト)作戦」である。南部の京漢、粵漢、湘桂の各鉄道沿線の要域で、この地点の攻略及び飛行場の壊滅作戦である。この作戦により桂林・柳州の在支米軍最大基地の飛行場は使用不能となるのでした。

十一月三日、石炭虚出発、武昌に向う。いよいよ駄馬本来の戦事行動に移る。宿営第一夜は雨の中のなかの露営である。燃料不足にて困難し、枯草等を集めて炊事の燃料とする。

十一月二十二日、武昌を出発、岳州に向う。武

漢三鎮は夕刻より米軍に猛爆され、その様子があるか宿营地より望見でき、炎上する炎は宙天に達し壮絶の極みであった。

十二月八日、岳州に到着、岳州城外五星牌において、黒田一等兵行方不明となる。武昌よりの行程二百七十キロ、十二月十三日、我が部隊は本日付で湘江作戦が終わる。

十二月十六日、長沙に向かって岳州を出発、三十日長沙に到着する。岳州より二百キロの行軍である。

昭和二十年一月十五日、衡陽に到着す。長沙よりまた二百キロの行程である。第二十軍の指揮下に配属となり南部粵漢打通作戦に参加する。酷暑と雨と泥濘、加えて糧秣半定量にて人馬共に困却するも強行軍を実施す。粵漢鉄道とは、中国大陸を縦断し、湖北省武昌と広東とを結ぶ千九十六キロの中国における重要な鉄道である。

経済文化の発展に重要な役割を果たしてきたこの粵漢鉄道の建設は米・英・仏・独など各国の借款

を得、また中国自身で建設し、欧州大戦の勃発により中断するなど、着工以来三十一年（一八九八年四月〜一九三六年）をもって蒋介石総統が開通させた鉄道である。

この作戦で打通する区間は、全線の約三分の二、約八百七十キロであった。第二十軍が奇襲して無疵占領を策したのは、湖南・広東省境に近い、大瘦山脈を横断しようとするところで、墜道、橋梁が多く、最も建設に困難を極めたところである。

一度破壊されれば、その復旧に多大の技術と資材と年月を必要としたところで、そのため挺進隊による挺進作戦がとられたのである。

私達は独立輜重兵第六十二中隊となり、岐章を経て羅家洞に到着す。徴発により食糧の補給を行い、曲江に前進する。軍通信隊、患者輸送隊と同じく行して出発する。

摺嶺トンネル内は敵が爆破した貨車十数両に埋められていて、馬匹の通過不可能なため九峯墟を迂回前進する。出発後二時間して、水歩頭付近の

山上より敵の猛射を受ける。初めて至近距離の敵に遭遇する。

この敵と応戦、これを排除して、敵中を突破、前進するも概ね二十キロ前進したる辺にて薄暮となり、止むなく前宿營地の羅家洞に反転する。

昭和二十年二月四日、摺嶺トンネル内の作業に従事する。このトンネルは第四十師団の挺進隊によつて占領されてから、まだ十日余りしかたつていなかったのである。かくして大隊は、二十一日午前、良田粵漢線地区に達し、同時に所定の攻撃目標を占領した。しかし既に橋梁は破壊されており、隧道も一つは機関車を隧道内で爆破していた。五日、摺嶺トンネル内を通過して前進する。枯竹などの松明やローソクなど最小限の急造の灯火を使用して通過す。凹凸の大きい貨車上に並べられた板の上を行軍す。兵馬共に困難その極に達す。八日、樂昌に到着す。

十日韶州（曲江）に到着する。第四十師団は敵部隊を追撃して南雄に前進中で、我が部隊は強行

軍にて十六日、韶州盤橋、さらに黄屋村に移駐する。そして粵漢線鐵路を源渾汎に向つて前進する。

粵漢路は二十〜五十メートル間隔に寸断され、レール、枕木などすべてなく、行軍に困難をきたす。また橋は大小を問わず破壊尽されており、見事なる破壊だと驚嘆の声を上げたのである。

十七日、広東市郊外の沙爪に二泊し、陣地構築の偵察を行う。欄樹排村に指揮班はじめ各小隊は分宿す。付近の大田令・田郷などの各部落は宣撫地区で貧村であるため徴発を禁ぜられる。

二十二日、牛頭山三九〇メートル、高嶺山三七〇メートル（いずれも日本名）、南北八キロ重畳の山中を掘削して、二個大隊を收容出来る洞窟を構築すること二十五日作業を開始する。状況極めて悪く、ゲリラ出没し、また夜間は牛頭山に烽火が立つなど不気味な状況下での陣地構築作業を続行する。

この陣地構築作業に広東市内より労務希望の姑娘数十人を、指揮班をはじめとして雇い入れたの

である。姑娘とのいろんな風聞が飛び沙汰されたのもこの期である。彼女達は既に日本の敗戦近しを知っていたに違いない。労賃はすべて現地通貨の支給を要求した。軍票の無価値を知り尽されていたのである。

五月中旬、米軍用機が空から撒いたチラシを受け取り、見ればドイツ軍はソ連に無条件降伏し、日本もやがてそのようになると、木の葉が今にも落ちそうな凶柄が描かれていたことが思い出される。

八月十六日、南昌南部の黄家において、終戦で無条件降伏の重大発表があり、横瀬隊長は茫然自失とある。武装解除を強要してきた中国地方軍と西川連隊は交戦、猛反撃をして敗退せしむる。中央軍の命令なき限り地方軍の武装解除には応じてはならないと、上将の命令があったのである。

十七日部隊全員集合して、終戦の聖旨が伝達される。各種の公用文書は師団命令により焼却する。中国軍の徴発兵器など全部池や川に投棄す。

十一月一日慈湖鎮に到着し、集中生活を始める。兵舎、炊事場、パン工場、医務室等を建設する。中国兵は時々物資を強要する。

二月八日、中国軍の我が隊の接收を完了する。軍需品、馬匹、兵器、糧秣、被服などである。

三月二十二日「濟州丸」（水雷敷設艦）に全員乗艦する。この日の検査は極めて簡単に乗船完了、二十四日博多港第二号岸壁に着岸する。時に午前八時であった。

船内で休養の後、十一時に下船する。検査完了、給養給与関係終了、復員式が挙行され、各証書、表彰状付与、進級任官の発令があり、以上にて復員式を終了、部隊は解散した。私は部隊の命令で、昭和二十一年三月二十四日付にて兵長より伍長に任官された。

特に忘れることが出来ない思い出は満州に駐在した期間は、満人の衣服を着て、鍬や鎌を使用し馬鈴薯、人参等の畑作業したのである。しかし軍事演習の時だけ軍服であった。

補充兵が入隊した時には儀銃（木製の粗末なもの）であり、いかに日本国内では物資不足だなど思った。中国大陸の中央部で実践中は、軍馬不足のため、ある部隊では十五、十六歳の少年に牛の手綱を引かせたことがある。これは隊員不足に役立ち、少年も安全で食料に心配がなく、日本では見られない光景であった。終戦となり、私達が日本へ帰るのに一緒に日本へ連れて行ってほしいという。結局牛一頭を持たせて納得させたが別れも涙がにじむ思いであった。

私達の部隊は東京、長野、富山、石川の四地域で、「四六一三同交会」が昭和四十六年三月二十日、長野善光寺にて、参加者八十七人で発足した。同五十年の富山県氷見マイアミホテルでは参加者百十六人の多数であったが、以後は四十数人となり、五年前に解散となり、その後は文通等で交友している。

## 【解 説】

体験記筆者は独立輜重兵第六十三中隊（呂第四六一三）員として大陸打通作戦に参加する。

この打通作戦は米軍機による日本本土の空襲を防ぎ、あわせて南方の資源を運ぶために鉄道路線と道路を確保するのが目的であった。作戦全体は「大陸打通作戦」というが、昭和十九年四月から五月に北京く漢口の打通を図った序盤戦を「京漢作戦」、五月以降を「湘桂作戦」と呼んでいる。

全長六千五百キロ、全部徒歩でのこの「一号作戦」は、正に世紀の一大遠征ともいわれ、恩欠者の労苦体験記の執筆も多く記録されている。

筆者も、この作戦の労苦を詳細に語っており、雨と寒さ、あるいは炎暑の中の行軍、陣地構築、そして輜重隊としての労苦もひとしおであったと想像される。

「湘桂作戦」は昭和十九年五月中旬に開始され、長江の武漢地区から湖南省湘江流域の長沙、衡陽、全県そして広西省に入り、桂林、柳州、来賓、南寧、仏印を結ぶ鉄道・道路の確保が目的であった。

中支那派遣第十一軍の人員三十六万二千人、馬六万七千頭、戦車百三台、火砲千二百八十二門で七カ月有余、警備、反転作戦を入れて約一年四カ月の作戦であった。そして南支那派遣軍の十四万人と合わせると総勢五十万人の大作戦で、対する中国軍は百万〜二百万人ともいわれ、双方の損害も合わせて数十万人に達するという。

砲兵隊は砲と弾薬を、輜重隊は弾薬、物資を馬の背にして運ぶ、峻険な山道でも何とか越してゆく。合言葉を定め、遺髪、遺爪を取り、遺書を書き、不要な私物を焼き、身辺を整理し、衣料、軍服はさることながら、五センチほどの布を戦闘帽に重ねて夏は日差しを避ける。

そして水筒、雑嚢、防毒面を肩から下げ、歩兵であれば百二十発弾薬箱二個、手榴弾と帯剣を腰に着ける。それに、あれば乾パン、粉味噌、粉醬油、缶詰などを持ち、靴下には米を入れる。そして部隊によつては銃を持ち、鉄帽、飯盒など装備をつけ、歩きくたびれた靴を引きずりながら、こ

んな兵隊が蟻のように歩くのである。